2021年度（令和3年度）

第1回福山市地域コミュニティ推進懇談会

○開催目的

「福山市地域コミュニティのあり方検討委員会」の報告を踏まえた多様な主体の取組を検証するとともに，各団体が連携，協働して地域コミュニティの再構築に向けた取組を推進するために開催しています。「人口減少時代の地域コミュニティのあり方報告書」で報告された内容について，できることから取り組んでいきます。

○委員（五十音順）

	井上　誠	地域づくり塾修了者（御幸学区）
	小葉竹　靖	福山市市民局長
	佐藤　賢一	福山市自治会連合会会長
	杉原　広昭	福山商工会議所青年部運営専務
	道城　俊二	福山市 PTA 連合会幹事　※欠席
	橋本　哲之	福山市社会福祉協議会会長　※欠席
	平岡　顕治	中間支援組織（NPO 法人ひとまちスタジオ理事長）
	廣田　要	福山明るいまちづくり協議会会長
	藤井　眞弓	福山市女性連絡協議会事務局長
	古谷　輝昭	福山市老人クラブ連合会副会長
	真室　明美	福山市福祉を高める会連合会副会長
	村田　政雄	福山市公衆衛生推進協議会副会長兼事務局長
	吉田　美砂	福山市子ども会育成協議会事務局長
	寄髙　英樹	地域づくり塾修了者（光学区）
座長	渡邉　一成	福山市立大学都市経営学部学部長

○アドバイザー

櫻井　常矢（福山市持続可能な地域コミュニティ形成に関する政策アドバイザー
高崎経済大学地域政策学部教授）

2021年度（令和3年度）第1回福山市地域コミュニティ推進懇談会

〇日時

2021 年（令和 3 年）7 月 12 日（月）18:30～20:30

〇会場

福山市役所本庁舎 3 階　大会議室

〇次第

1　事例発表「地域活動の負担，担い手不足への対応」

(1)「地域での役員兼務，次世代への情報発信について」

福山市福祉を高める会連合会副会長　真 室 明 美　委員

(2)「地域活動を担う次世代として思うこと」

地域づくり塾修了者（光学区）　寄 髙 英 樹　委員

2　ワークショップ・発表

(1) 事前説明

(2) ワークショップ

テーマ１「より多くの人がやりがいを持って取り組める地域活動とは」

テーマ２「地域組織の声を聴くためには」

(3) 発表

・講評

・全体を通しての質疑

・まとめ

・事務連絡

【懇談会の内容】

〇事例発表１「地域での役員兼務，次世代への情報発信について」

私は，福山市福祉を高める会連合会の副会長を務めている。

これ以外にも地域で複数の役員を務めており，ちょっと役員兼務が行き過ぎている状態にある。坪生学区まちづくり推進委員会の構成団体の中だけでも７つ。それ以外の活動も加えると全体で 15 の役員を兼務している。

必然的に出席する会議も増え，月７～８回出席している。もちろん，会議に出るだけでなく，会議を仕切る役割もあるため，会議の書類を読み込むだけでも非常に苦労している。

真 室 明 美 委員

（福山市福祉を高める会連合会）

このように多くの団体へ参加するきっかけとなったのは，定年後すぐに町内の老人会からパソコン教室の講師を依頼されたこと。当時は，仕事もしていたため，パソコン教室の講師として土日の１，２時間の関わりのみだった。そこから２，３年すると老人会への参加のお誘いと併せて「せっかくだから…」と会長への就任依頼があり，「はい，分かりました」と老人会の会長に。その後，前任の「福祉を高める会書記長」の急な退任に伴い，就任依頼が来た。「やったことがないから…」と言ったものの，「やっていけば分かるから」と言われ「はい，分かりました」と「福祉を高める会書記長」に就任。このように「はい，分かりました」の積み重ねで今の状況になっている。

自分でも役員をやりすぎていると思っているが，悪いことばかりではなく，いろいろなことをやっていると人とのつながりが出来たことがよかったと感じている。坪生学区は，昔から住んでいる人と JFE 関係で造成された団地に住んで 30～40 年経つ人が混在している地域。私は，後者だが，昔から住んでいる人の中に入って，顔見知りが増えて，仲良しになれたことはよかったと感じている。新型コロナウイルス感染症の影響で地域のいろいろな行事がなくなり，地域活動に充てる時間が少なくなって，楽になったという素直な気持ちもあるが，新型コロナウイルス感染症が落ち着いたら，以前のように活動をしていきたいと思っている。また，生活支援事業（高齢者世帯の除草，庭木の剪定）の作業はしんどい部分もあるが，感謝されるとうれしい。それがクセになっていろいろな活動を続けられている。

これから，40・50 代の次の世代に様々な地域活動を受け継いでもらえるかが課題。若い世代の人たちは無関心なのではないかと思っていたが，町内会の総会を書面開催したら，若い世代から貴重な意見が寄せられた。自分たちの活動の情報発信を次世代に届く形で行うこともちろんだが，いかにコンタクトを取り参加を促すか。また，意見がぶつかるようなことがあれば，役員は若い世代に寄り添うことも大切。みんなが今住んでいる自分のまちが少しでも明るく，ここにいてよかったと思えるまちになれば万々歳だ。

〇事例発表２「地域活動を担う次世代として思うこと」

寄 髙 英 樹 委員

（地域づくり塾修了者（光学区））

光学区町内会の副会長をしている。

私が思う地域の現状について話したいと思う。１番目は，地域の役割（必要性）が不要になり，コミュニケーションが希薄になっている。いろいろなことが便利になったことで，コミュニケーションを必要とする場面（例：冠婚葬祭）が減少してきた。２番目は，１番目とは真逆だが，地域の役割（必要性）が増している。高齢者世帯では，若者が気づかない不自由なことがあり，日常でも有事でも遠くの親戚より，近くの他人が助けになることがある。子育て世代にとっても年長者の経験や言葉が助けになることがきっとある。

私自身は，町内会の役員になって初めて町内会の活動を認識した。役員になるまでは，ゴミステーションの掃除当番と回覧を回すことくらいしか知らなかった。

～地域の人が地域活動のことを知らないのはなぜか？～

①親世代が地域活動に出るので子世代が出る機会がない。

②引っ越して来た人に知らされていない。自分が引っ越してきたときにも地域活動に関するお知らせはなかった。

③役員以外の人に頼みにくいので役員だけでやってしまっている。

このようなことから地域の人たちにちゃんと地域活動の情報が伝えられていない現実が見えてきた。

～地域活動が活発にならないのはなぜか？～

①必要性に気づかず，自己完結している。

②知ってはいるが，自分に降りかかっていないので，そこに関心が向かない。（他人事）

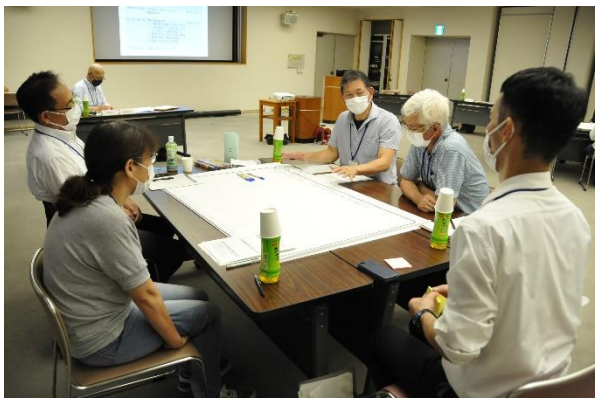
③誰かが解決してくれると思っている（依存型）

このような方々に地域活動に興味を持ち参加してもらおうと思うと，地域活動の内容と理由をセットにして，情報発信をしていかないといけない。そのためには，「やる理由を明確に」して，「しなければならない」ではなく，「したい」で考え，「やりたいことを一緒にやる仲間を，世代を超えて募っていく」ことがとても大切だと思う。

過去の慣習にとらわれず，これから必要なことを先人たちの知恵を借りながら次世代が担っていき，誰かの役に立つ喜びを感じながら活動ができれば良いと思う。

〇ワークショップ・発表

各テーマについて，各委員が３班に分かれてワークショップ形式で意見交換を行った。



テーマ1 「より多くの人がやりがいを持って取り組める地域活動とは」

■地域活動の入り口は，「楽しい」ことから

・強制的に参加を促すのではなく，自主的に参加ができる活動
・「楽しい活動」が必要。個々の趣味を活かせたり，楽しめたりする活動（ファッションショーなど）
・誰かの役に立っていると思える活動
・活動内容が地域住民に届き，地域のためになっていることが感じられ，親しまれる活動

☛どうやったら、そうなる？（手法）

・役割は，その人の得意分野をお願いし，適材適所で活躍してもらう
・地域住民のニーズに合った活動「各世代のニーズ」を知る（子育て，健康・美容，防災など）
・「誰かの役に立っている」と思える活動を続けることで，やりがいを持てる
・楽しい活動や，住民からお礼を言われる機会を増やし，徐々に参加意欲を増してもらう
・「交流」や「対話」が大事。人と関わることで楽しくなり，やりがいとなる
・頑張った人には，お礼の気持ちを「地域通貨」で支払い
・一方的に奉仕したり、助けられたりでなく，互いに「ＷＩＮ－ＷＩＮ」になるように

テーマ2 「地域組織の声を聴くためには」（地域活動に関わる人の本音をどう把握するか）

■コミュニケーションの努力

・高齢者が若年層に歩み寄ることが大切
・女性，高齢者，外国人を含む集まりを持つ
・団体の横のつながりをつくり，情報発信の機会を多くする
・仲の良いコミュニティごとのコミュニケーションで広がりをもつ
・何かの行事の後に雑談の時間を設ける
・地域活動のプレゼンテーション(発表会)で活動内容を発信，活動を知ってもらう
・悩みごと，困りごとに耳を傾け，迅速に対応すれば，地域から声は出てくる

■地域づくり循環サイクル

地域の信頼関係が高まる

■「仕組の変革」により，持続可能な 開かれた地域組織体制へ

・多世代へのアンケートやインタビュー（サイレントマジョリティの潜在的ニーズを把握）
・本音の話し合いを促進（まちづくりミーティング，世代間交流など）
・組織の人の入れ替え（役員の長期化に制限，老人会の年齢制限引き下げ）
・まちの発信YouTubeスタジオを作る（住民や若者，外部の人が魅力発信）

〇講評

櫻 井 常 矢
アドバイザー
（高崎経済大学
地域政策学部 教授）

【地域活動を知らない】

役員以外の人が参加してくれないではなくて，そもそも活動が知られていない。伝えていない。「若い人たちに対して，我々からのアプローチが弱い。」この言葉が今日の発表で印象的だった。若い人たちは無関心ではなく，気持ちはある。我々のアプローチと伝えることが基本である。

【取り組む理由】

何のためにやっているのか，皆さん知らない。団体や事業の名前だけが伝わっている。輪番制でとにかく団体の役員にならなければならないとか。団体の会長に「何のための組織ですか。」と聞いても意外に答えられない。前任者から引き継いだだけになっている。何のために取り組むかを明確にすることが大事であり，もっと重要なことは，一人ひとりがそれを明確にする作業に関わること。ひとは，取り組む理由を自分の言葉にすると，必ずこだわりが生まれる。

【リーダー（先輩）基準からその人基準へ】

みなさんが言うように，地域活動は楽しくて，やりがいがあるべきだと思うが，何が楽しいかは人によって違う。人と交わることが嫌いな人もいる。その人は家で事務的な作業をやることが得意かもしれない。やりがいも人によって基準は違う。やりがいも楽しさも「リーダー（先輩）基準」から「その人基準」と捉えることが大切ではないか。

リーダー（先輩）基準でみんなに同じことをしてもらうことが一番楽。そうではなくて，その人基準が大切。ただし，ここで問われるのが「コーディネート力」。「その人基準」でいくと，みんながバラバラで行動することも意味するため，やりがいのあるのは良いのだけれど，地域として肝心なことができていなかったりする。だから「コーディネート力」はこういう時にとても大切である。

【知る機会・感謝する場面をつくる】

「知る」とか「感謝する場面を作る」ことは地域にとって大切である。

地域で普段頑張っている人は，ひとから感謝されたり，意外と褒められたりする場面がない。まして，地域づくりはボランティアが基本だからお金が出るわけでもない。

しかし，他人に感謝されると気分が良くなる。今日の発表にもあった「くせになる」。嬉しくなる。もっと頑張ってみようかなって気持ちになる。そうした意味では，普段の地域の取組の発表会をやってみるのも良い。ある地域では，毎年，男性陣が女性陣に手作りのプレゼントを贈ったりしている。この地域は何でも男性が中心の社会だった。「それではだめだ，女性も活躍できる地域をつくる」として変わった。そうした地域では高齢化は進んでいるけど，みんながすごく楽しんでいる。高齢化だからこそやりがいをもって楽しく活動することが重要。その意味でも「感謝する場面」をつくってみてはどうか。

【まとめ】

これまでの懇談会の議論の中でも，ある地域のリーダーが「現状維持ではだめ。何を守って，何を変えるのかを考えなければいけない」と言われた。地域課題はどんどん押し寄せてくる。地域の取組をじっくり考えていきたいけど，緊急課題のようにも感じる。

「個人」でも暮らせる社会になったという意味では，地域活動も選択肢の一つである。そのため「選ばれる地域活動，魅力ある地域活動」になりたいものである。そのためのヒントを今日整理できたと思う。

〇まとめ

渡邉一成　座長

（福山市立大学　都市経営学部　教授）

【楽しい活動】

「楽しい活動」とするためにはどうすればよいかと言えば，いろんな人に「あなたの楽しい活動って何？」って聞くことが大事だと思います。「祭りだ」とか「運動会だ」と様々な活動が出てくると思いますが，その話を聞いて，皆での話し合いにより収束していくことが大事だと思います。私は都市計画が専門なので，「ここにどのような建物があればいいですか？」と尋ねると，皆，人それぞれに自分が欲しい物を言います。でも，それを全部実現することは当然できません。その中で，みんなが「これがいいよね」って言う物を作らなければいけないわけで，そのためには話し合いで決めていくことが大事だということです。

つまり，楽しい活動をするために何が必要かっていうと，話し合いの輪を広げて話し合いを深めていく必要がある。というのが１つのポイントになります。

【自主自立・客観性】

地域活動は，自主自立ですから，基本的に自走して頑張っていただくということになりますが，例えば民間企業が取り組む事業を自社で決めるのは当たり前のことです。その民間企業はその当たり前のことをどうやってやるかというと，もちろん自分たちで考えてやるのですが，時には専門家を呼んでアドバイスを受けています。

そういう意味では，地域活動も，もちろん自分たちの地域の信頼を高めるみたいなこと，あるいは自分たちもその地域の価値を高めて，自分たちの地域に軸を持つということに対して，一生懸命取り組まれていると思いますが，外から見たときに自分たちの地域はどう見えるのかというアドバイスを受けられると，こんないいことがあるのか，こんなことをしたらいいのでは，ということもあるのではないかと思います。

【これからの地域活動】

話し合いの輪を広げ深めること。そして，第三者的なところから見る，これからの地域活動はそういった支援のあり方が必要な段階に入ってきていると思います。

支えてもらうことによって良くなることもあるし，新たな弾みがついて，ちょっと違う方向に話が動いたりすることもあるのかもしれません。

そういう意味では，今日は，地域活動のあり方について，すごくいい議論がたくさん出ましたので，次回のこの会議では，その地域活動の支援のあり方について，少し議論を進めていければと思います。